

平成27年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成27年4月～平成28年3月

1. 学校概要

学校名 愛知県立豊田東高等学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

所在地 〒471-0811
愛知県豊田市御立町11丁目1番地

E-mail : toyotahigashi-ko@pref.aichi.lg.jp

Website : http://www.toyotahigashi-h.aichi-c.ed.jp/

児童生徒数：男子 96 名 女子 619 名 合計 715 名
児童・生徒の年齢 15 歳～18 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (地域連携)

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

愛知県立豊田東高等学校（総合学科）は、ユネスコスクール加盟校であり、「環境教育」、「国際理解教育」、「地域連携教育」を3つの柱としてESD「持続可能な開発のための教育」活動に取り組んでいる。これらの三つの実践は、個別の分野にとどまらず、相互に関連し合っており、今後よりいっそうの内容の充実に努めていきたい。

以下に、本校の主な活動内容について、冒頭に述べたESDの3つの柱を含め、項目別にまとめて示す。

ア 環境教育

〔主な取組〕

I セセラギプロジェクト

事前講義で御立公園の変遷と現状および課題を話していただいた後、一年生全員で御立公園とその周辺のフィールドワークを行った。矢作川森林塾の理事長である碓伸夫さんを中心に、多くの方々にサポートをしていただき、例年以上に多角的な研究を行うことができた。生徒たちは、「どのようにしたら人々が出会う自然豊かな公園になるのか」を考えながら、セセラギの水位調査や生物、植物調査、ゴミ拾い、大木の伐採やベンチ製作など、グループに分かれて活動した。その後の授業において、グループで散策マップや活動報告書を作成し、矢作川森林塾へ提出した。

報告書をもとに、総合発表会にて活動報告を行ない、後日、矢作川研究所主催の、矢作川学校シンポジウムに参加し、活動報告を行ない、現在の矢作川の外来種の状態を知ると共に矢作川を守るための、今後の対策と考えを発表した。

本活動は、地域の研究機関である豊田市矢作川研究所、NPO 法人矢作川森林塾などの有志団体、大同大学の教授や学生の方々などと連携を図っていることが特徴である。今後も御立公園の整備を通して地域環境研究を進めていきたい。

- ① 10月19日（月）6限
講演会「未来につづく河畔林の整備」
講師：NPO 法人矢作川森林塾 碓伸夫氏
対象：第1学年（240名）
場所：本校プレゼンテーションルーム
- ② 10月26日（月）6・7限
野外活動「セセラギプロジェクト」
協働団体：NPO 法人矢作川森林塾、国土交通省豊田市河川事務所、
豊田市矢作川研究所 大同大学
対象：第1学年（240名）
場所：矢作川河畔 御立公園
- ③ 10月29日（木）7限
野外活動「セセラギプロジェクト」
活動報告書作成
対象：第1学年（240名）
場所：各教室
- ④ 2月10日（水）3限～6限
総合発表会：活動報告プレゼンテーションの実施
場所：本校体育館

⑤ 3月5日(土)

矢作川学校ミニシンポジウム：セセラギプロジェクト活動報告

参加者：第1学年 科学部生徒3名 第2学年 生徒会長

場所：豊田商工会議所

Ⅱ 理科の特別講座での取り組み

豊田市の山間部で問題になっている獣害について現地調査を行ない、農業総合試験場や農家で話を聴くことで、被害の実態を知るとともに、人間の生活と自然保護との両立の課題について話し合った。

① 8月26日(水) 野生生物との共存 ～里山で獣害を学ぶ～

場所：愛知県農業総合試験場，豊田市小原地区

内容：1年生が「生物基礎」で取り組んだ獣害問題の現地調査。イノシシを捕らえる罠を実際に見学したほか、小原地区に移動して、現地の方と対話を行った。また、下草刈りなど、緩衝帯をつくる作業も体験した。

Ⅰ 国際理解教育

「国際理解教育」としては、マレーシア修学旅行における現地チェラス校との文化交流会で日本文化の紹介として和太鼓の演奏を披露し、二学年全員で作成した折り鶴を英文の手紙を添えて贈った。チェラス校の生徒にも「Let it go」と「上を向いて歩こう」の合唱や、「おいでん総踊り」に参加してもらい交流を深めることができた。

また、オーストラリアパスコベール女子高校訪問による現地の人々との交流、七月にはデトロイト市長訪問団と十二月には、マレーシア高校生の訪問団の本校受け入れによる部活動や授業を通しての交流活動を通して、海外の人々をより理解しようと努め、異文化理解研究を進めた。外部講師による講演会を開き、国際社会で活躍する人々の話を伺い多面的な考え方ができるように努めた。

〔主な取組〕

I

① 4月～10月

総合的な学習の時間を利用して、異文化理解研究を実施。

マレーシアの文化について調査・探究し、現地での交流計画を立案。

対象：第2学年(240名)

② 7月18日(土)～29日(水)

オーストラリア、パスコベール女子高等学校への訪問

参加者：代表生徒15名、引率教員3名

③ 7月25日(土)

デトロイト訪問団の受け入れ

部活動(箏曲部、茶道部、弓道部、剣道部、書道部)とボランティアによる和太鼓演奏者の生徒が中心となって、日本文化を紹介し、英会話部の生徒が英文による日本文化紹介パンフレットを作成し、学校内を案内した。

③ 10月12日(月)～15日(木) 3泊4日

マレーシア海外修学旅行

対象：第2学年(240名)

④ 12月4日(金)

マレーシア高校生本文団の受け入れ

日本訪問中のマレーシアの高校生17名が3名の教員・保護者とともにも本校を訪れ、本校生徒との交流授業と、交流会を実施した。

1年英語表現Ⅰの時間では、グループに分かれて英語で自己紹介や、互いに自国の文化紹介を行なった。リラックスした雰囲気の中、交流を楽しんだ。

業後、華やかな民族衣装で民族舞踊を中庭にて披露していただいた後、IFC部の生徒が英語で校内を案内して回った。書道体験や、日本の遊びを体験してもらった後、グループごとに会話を通しての交流会を行い、交流を深めた。

Ⅱ 国際理解講座の実施

環境問題や国際理解をテーマにした講演会を実施した。自分の経験から得た知識や思いを、次世代を担う未来ある若者に伝えたいという熱意でお話をしていただいた。生徒たちは地域や世界の自然環境を理解するばかりでなく、グローバル時代における日本人としての生き方や、これからの自分の進路について考えを深めた。

① 10月26日(月) 二学年対象(修学旅行後の研修)

演題「マレーシアの生活と文化」

講師：オイスカ研修生 ドゥーセット・スー氏

パワーポイントに映し出される、美しい自然の花々や、エメラルドグリーンの中の家の、オラウータンのやさしい笑顔の写真などを見ながら、生徒は修学旅行で訪れた都市クアラルンプールでは見ることのできなかつた田舎の生活や学校についての話を伺いマレーシアの文化についての理解を深めた。

② 11月9日(月) 一学年対象

演題「砂漠に生命を」

講師：グリーングラスロツ代表 光岡 保之氏

ウズベキスタンでの植林活動というご自身の経験をもとに、人間の命をつなぐ生命である緑の重要性についてお話しいただいた。環境に国境はないというお言葉に、環境問題にとどまらず、国際理解についても、考えた生徒たちは、自分たちが地球環境保全のために何ができるかについて考えを深めた。

③ 11月16日(月) 二学年対象

演題「グローバル時代に対する職業人人生設計のヒント」

講師：三菱総合研究所客員研究員 近藤 敏夫氏

現在の世界情勢の中で、日本人特有の、謙虚で、思いやりがあって、礼儀正しい態度、またきちんと仕事を最後まで成し遂げることができることこそが日本人の美德であり、世界で必要とされている人材であるとお話しいただいた。また、生徒たちは、内容のある言葉を、簡潔に、タイミングをみて、ゆっくりと話すことの大切さ等、国際社会のみならず、将来求められる社会人としてのあり方について考えを深めた。

④ 2月4日(木) 一学年対象(修学旅行事前学習)

演題「マレーシアの生活と文化」

講師：オイスカ研修生 ドゥーセット・スー氏

⑤ 2月15日(月) 一学年対象(修学旅行事前学習)

演題「一アジア大交流時代ー世界で活躍できる人財に！」

講師：マレーシア政府観光局 徳永 誠氏

世界経済の中でのアジアについて、また異文化理解の観点からの講演を聴くことにより、マレーシアの歴史的文化的背景について学び、異文化理解研究を深めた。

ウ 地域連携教育

「地域連携教育」としては、桜町本通り商店街との連携を継続し、自作の紙芝居を読み聞かせたり、模擬店を出店するなど実際に地域の人々との触れ合いを通じて交流を深めている。桜町本通り商店街では一昨年から12月と1月の夜、足助の「たんころりん」にヒントを得て、あんどんを灯している。今年度もそのあんどんの絵付けを美術部、書道部が担当し、三十九基を作成した。このあんどんは商店街で灯すだけでなく、2月に行われた総合発表会のフットライトとして活用した。

また、調理実習で獣害問題になっているイノシシの肉を利用し、自分達で工夫し考えた創作料理を調理している。

〔主な取組〕

- ① 5月24日(日) ふれ愛フェスタ2015
参加者：保育プラン、写真科学部・科学班、美術部、JRC部、
家庭部156名が参加
内容：駅前商店街の活性化イベントにおける催し物の企画・運営
写真科学部(科学班)によるスライムの作成、JRC部による「射的」や「あたってくるくる」、美術部の手作りジグソーパズル、保育プランによる手作りのゲームに挑戦したり、紙芝居による心のこもった読み聞かせを熱心に聴いたりするなど地域の子どもの笑顔が印象的だった。また、3年生ボランティアを中心とした「フリーマーケット」、家庭部による焼きそば、ホットドッグ、クレープ、五平餅の模擬店など大盛況でした。地域の人々とのふれあいを通じて、参加した生徒にとっても意義深い一日になった。
場所：桜町本通り商店街
- ② 8月8日(土)、11月8日(日) チーム八日市
内容：桜町本通り商店街において、毎月8日に開かれる「八日市」が学校休業日と重なったときに、販売補助や部活動の野外発表を実施。
8月は17名のボランティア 科学部部員、合唱部員が歌声を披露、11月は14名のボランティア、科学部部員、箏曲部員が演奏を披露した。
場所：桜町本通り商店街
- ③ 10月31日(土)とよたアートハロウィン
内容：2年美術プランの生徒8人が幅3.6メートル、高さ1.8メートルのパネル三枚に豊田スタジアムや豊田大橋を背景にお化けがお菓子を取り合う物語などを描き展示した。また3年服飾プランの有志8人はハロウィン当日の31日に会場に訪れる子ども達に着てもらおうハロウィンの仮装用衣装を製作した。
場所：豊田のまちなか(GAZA 広場)
- ④ 12月18日 レッドリボンメッセージコンサート
内容：豊田市、ソロプチミスト豊田と連携した12月のエイズ防止キャンペーン
合唱部が歌を披露し、JRC部がエイズ啓発メッセージを発表した後、最後に吹奏楽部が演奏を行なった。
参加者：JRC部、合唱部、吹奏楽部
場所：豊田市駅前通り
以上のように、本校の地域連携は、部活動によるボランティア参加のほか、各科目選択プランの授業実践の場として機能している。

おわりに

これらのESD活動は、異文化理解、自然との共存、地域社会とのかかわりについて考えを深め、将来持続可能な社会を形成していくために将来自分は何をしたいのか、何ができるのか考える場になっている。また、地域の人々、社会人の人々、海外の人々との交流活動を通して、相手に喜んでもらうことが生徒にとっても喜びであり、今後の活動へのエネルギー源となっている。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

はじめに

E S D (Education for Sustainable Development) 「持続可能な開発のための教育」は、現代社会の課題(環境、貧困、人権、平和、開発等)を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。その対象は、環境、経済、社会、文化など多岐に及んでおり、さまざまな側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要である。

平成19年度に総合学科として改編された本校では、その特徴を生かしたE S D活動を進めている。これまでに、E S Dの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、「環境教育」、「国際理解教育」、「地域連携教育」の三つを柱として、持続可能な社会を創る市民を育てる教育活動を実践する中で、社会における諸問題に注目し、それを解決することができる人材育成に取り組んできた。本稿では、これらの活動実践を紹介する。

1 環境教育からのアプローチ～さまざまな立場の意見を知る～

本校では、学校の横を流れる矢作川やその流域にある里山等をフィールドとして「産業社会と人間」や「理科」を柱として環境についての教育を行っている。本稿では夏休み中に実施した、希望者対象の理科の特別講座「獣害について考える」を紹介する。

(1) 生徒の活動

本校が立地する豊田市の山間部では、イノシシやシカによる農作物の食害を中心とした獣害が問題となっている。生徒たちに、人間の活動と自然との関わりを考えさせるために適切な事例だと考え、環境教育の題材とすることにした。

ア 現地調査と課題発見

まず、獣害問題を知るために、現地調査を行い、里山生態系について学んだ。当初は獣害という言葉からイノシシやシカを人の暮らしに対する脅威だととらえる生徒が多かったが、農業総合試験場や農家で話を聴くことで、被害の実態を知るとともに、イノシシが増えた背景には人間の活動による森林の荒廃があることを学んだ。この活動の中で、人間の生活と自然保護との両立に課題があることが分かったため、生徒に感じたことや考えたことを話し合わせ、課題解決の道を探ることにした(写真1)。



写真1 獣害対策の話し合い

イ 課題解決への取組

環境教育では多面的な思考を促す指導を行っている。現地でいろいろな立場の人々の話を聴くことにより、農家の人々の獣害対策の苦労などを知り、それを踏まえて生徒どうし

の意見交換を行った。その際、K J法を用いて、生徒たちにカードに意見を記入させてグループ内で提示することにより、意見を整理させた。

生後間もないイノシシがわなにかかかって、檻の中で不安そうに動き回る姿を見たことにより、駆除される動物の立場を意識した意見をもつ生徒や、イノシシによる食害から地域や世界の食料問題に視点を広げて考える生徒も現れるなど、生徒たちは、人と自然との共生を図る手段を考えたいという意欲をもつようになった。

(2) 活動の成果

身近な環境問題を題材とすることで、生徒間で共通の課題意識が芽生え、さらに、現地調査により多面的な考え方を身に付けることができた。こうした取組は、自然との共生や持続可能な社会づくりを考えて、対策を模索し続けることのできる人間の育成につながっていくと思われる。

生徒の感想

今日の実習で、獣害対策の大変さを身をもって感じることができました。私は高校一年生のときに、生物の授業で学んだときには、身近な問題と考えることができませんでしたが、実際に目で見て農家の方の話を聴き、いろいろな人やイノシシの立場に立って考えることができました。私は獣害対策や環境問題に関する仕事をしたいと思っています。今日勉強したことでその思いが強くなりました。私たちが今できることを常に考えて生活することが必要だと思いました。

2 国際理解教育からのアプローチ～グローバルな視点を身に付ける～

(1) 生徒の活動

本校は、例年、修学旅行を利用してマレーシアのチェラス校を訪問し、文化交流を行っている（写真2）。また、姉妹校であるオーストラリアのパスコベール女子高校とは、隔年で相互訪問を実施し、ホームステイやメール交換による交流を定期的に行っている。本校では、これらの交流活動以外にも海外の高校を訪問するなど、海外と活発に交流し、国際理解面でのESDについても研究が進んでいる。生徒は他国の生徒と触れあうことで、日本とは異なる文化について理解を深めるとともに、異なる文化圏に生活する人と共生する手立てを考える姿勢を身に付けつつある。

ア 外国の人々との交流活動

本校は、修学旅行などで海外の学校を訪問したときや、外国の人々が本校を訪れた時を利用して、文化交流を行っている。

イ 異文化理解の取組

本校では、英語の授業時間に日本文化について英語で発表を行い、交流活動で日本文化を紹介する際の基礎的な能力を養っている。

当初は海外交流の中で日本文化を説明しようとしても、一方的な説明にとどまり、自分たちの説明を十分に理解してもらえないケースもしばしば見られた。このような中、パスコベール女子高校の生徒から「オーストラリアと日本の文化の違いは何か」と質問されたことをきっかけにして、多くの生徒が、日本の文化だけではなく、相手国の文化を知ることの重要性に気付き、その後のコミュニケーションが活発になっていった。



写真2 チェラス校との文化交流

(2) 活動の成果

現在では、生徒が交流活動を通じて積極的に互いの文化への理解を深めようとしたり、相手に話しかけようとしたりする様子が自然に見られるようになってきた。考え方や文化

の異なる人たちとの交流は、本校のE S Dの柱のひとつとして定着し、生徒たちの意欲や行動力を高める機会となっている。

また、海外の人々と直接コミュニケーションをとることにより、互いの文化的背景を理解し合うことは、自国の文化について再認識するよい機会にもなっている。

生徒の感想

オーストラリアの人々は、多民族、多宗教国家の中で自分の文化を大切にし、また異文化に対して敬意を持って接していました。ホストファミリーとの交流を通して、相手を理解したり、自分と違う何か新しいことを受け入れるということのすばらしさを知りました。そして、日本の文化の良さに気づき、日本文化を世界に広めたいと思いました。

3 地域連携教育からのアプローチ～社会貢献活動を実践する～

(1) 生徒の活動

本校では、豊田市山間部において、道の駅と連携してイノシシの肉を利用した商品を開発して販売している。また、豊田市中心部にある商店街との地域連携事業に参画し地域貢献活動に励んでおり、保育士を志望する生徒が、地域の子も達に自作の紙芝居を読み聞かせたり（写真3）、家庭部の生徒が、模擬店を出店したりするなど地域の方々とのふれあい活動を行ってきた。



写真3 紙芝居の様子

生徒たちは、自分たちの学びの成果を発表する中で、地域の方々から感謝の言葉を受けたり、子どもたちの笑顔に触れたりすることで、今まで以上に自発的に活動に取り組もうとする意欲を高めることができた。

ア 地域に根ざした実践活動

獣害で問題となっているイノシシの肉を利用した商品開発では、調理士や栄養士を目指し、環境教育の特別講座を体験した生徒が、地元のきくいもパスタや梨などに加えてイノシシ肉を素材として利用することを考えた。生徒たちは、授業で学んだ調理方法を活用し、試行錯誤を繰り返しながらもたいへん活き活きと納得のいくまで料理を工夫していた。

イ ディスカッション

この地域連携による商品開発では、生徒たちの活発なディスカッションが大きな特徴となっている。調理室では、「もっと～を入れよう」「～した方が良いのでは」といった声が飛び交うなど、生徒どうしで自由にアイデアを出しあいながら、創意工夫を凝らした食品開発を行っている。生徒たちは、「よりおいしくなるように工夫するのが楽しい」と話すなど、地域の方の喜ぶ姿を思い浮かべながら研究に取り組んでいる。こうして、生徒の若い柔軟な発想によって研究されたイノシシなどの創作料理は地元のレストランや商店で新メニューとして取り入れられ、高い評価を得ている。

(2) 活動の成果

地域連携教育は、総合学科の特色ある科目を選択している生徒たちが、授業で学んだことを実践する場となっている。学びを活かして、地域に貢献し、地域の人々に喜んでもらえることが、生徒にとっても喜びであり、今後の活動へのエネルギー源となっている。地域の人々との交流をきっかけに、将来、地域の人々の健康に携わる職業を希望するなど、生徒の進路選択にも影響している。

特にイノシシ肉の利用については環境教育での学びが活かされており、自然と共生することは、決して人が自然に手を加えないということではなく、野生生物を自然の恵みとし

て認識した上で、食材としての利用を図るなど、バランスよく自然を活用していくことが大切であるということが理解できるようになった。地域連携教育は、身近なところから始めることのできるESDである。

生徒の感想

地元の材料を使って、料理をするのは楽しかったです。特に、もっとおいしい料理になるように工夫するために、みんなと意見を出し合うことが本当に楽しいと思いました。イノシシを食べることも最初は抵抗があったけど、自分たちの工夫でおいしく調理できたと思います。私たちがイノシシを食べることで、自然のバランスも保たれるのだと思うと、一生懸命調理してよかったと思います。

4 本校ESDの成果と課題

ESDは「持続可能な」という日本語訳から、環境面が大きく取り上げられることが多い。しかし、ESDは環境だけでなく、経済や文化など数多くの視点から現代社会が享受しているさまざまな恩恵を未来社会へつなげていくための教育である。

本校のESDの評価にあたり、これらのESDの観点に基づくアンケートを、研究の初期、後期に全生徒に対して実施し、結果の変化を考察した。アンケート結果の一部を以下に示す。

Q1 環境問題、国際問題、地域問題を乗り越えていくためには、さまざまな価値観をもつ人たちに自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重する「交流」が大切である。

	初期	後期
そう思う	92.5%	97.2%
思わない	7.5%	2.8%

Q2 環境問題、国際問題、地域問題を乗り越えるために、ボランティア活動などに積極的に参加してみたい。

	初期	後期
そう思う	74.9%	84.3%
思わない	25.1%	15.7%

上記のアンケート結果に加えて、日頃の生徒の言動などから、交流の大切さや今後の活動について肯定的な展望・意見が増加していることが分かった。校外に出かけて現実の問題を直視し、その解決のために生徒どうしや地域の専門家を交えた議論を重ねることが有効であったと思われる。活動の実践にあたって地域の人々、企業や大学で働く人々、海外の人々と実際に交流する機会を豊富に設けてきた成果と言える。

生徒はさまざまな立場の人々や、さまざまな考えを持つ人々とのコミュニケーションを通して、自分を知り、他者を知り、相手を思いやり、多面的に考える力を身に付け、さらには積極的に課題解決に取り組もうとする姿勢を身に付けることができたと考える。

おわりに

「環境教育」、「国際理解教育」、「地域連携教育」の三つの実践は、本来、個別の分野にとどまらず、それぞれがつながって相互に関連し合っているものである。生徒は、これらの活動を通して、自分たちの将来を考え、自分たちが今取り組んでいる活動の一つ一つが持続可能な社会を創る活動へとつながっていることを理解することができた。このことは、将来も継続して自分と地域の環境を考え、持続可能な社会の担い手として生きていくことができる人間を育成するESDの目的にかなうものである。

今後も本校で今まで行ってきた取組を継続していくことにより、これからの将来を考え、社会に貢献できる生徒の育成に努めていくとともに、ESDの取組を周辺の地域や学校に普及していきたい。